作品とその批評

——*Robert Elsmere* と "Robert Elsmere"——

萩原博子

はじめに

本稿は，1973年11月24日，慶応大学において行なわれた，日本ペイター協会第12回年次大会の研究発表要旨をもとにし，その後の研究および，海外調査の結果をも加味してまとめたものである。副題の「*Robert Elsmere* と "Robert Elsmere"」は，発表の際に用いた表題であり，表記法を変えることによって，作品の題と，それについての批評文の題とを区別する。すなわち，*Robert Elsmere* は，Mary Augusta Arnold Ward (1851—1920) の書いた長編小説であり，1888年に完結した。"Robert Elsmere" は同年3月28日号の *Guardian* 誌上に発表された Walter Pater (1839—94) の批評とする。この論文中，イタリックで表わすのは小説原作であり，" " を附したのはペイターによる批評である。ロバート・エルズミアと仮名書きするのは，題名と小説の主人公である人物とを区別するためである。この他の人名は初出の際に原名の綴りを示し，歴史上，実在の人物には生没年を附す。尊称もなく生没年も附してない人名は作品中の登場人物と理解されたい。地名は，実在，架空を問わず，すべて原名で書く。形容詞的に用いてある場合のみ仮名書きとする。書物の名称は初出のみ原名と出版年を示す。執筆時期とずれる場合は執筆年を先に書く。また当然のことながら，作品中の登場人物が読んでいる書物の出版地や出版年や版

の種類は明記しない。*Robert Elsmere* の主人公の妻である Catherine が夜半ひとり *Imitation* を読んでいる描写があるが[1]，これは，その父親の遺品[2]であり，父親から受け継いだキリスト教信仰の正統性を妻だけは失っていないという象徴的な意味が重要なのであるから，bibliographical information を註に加える必要は認めない。*De Imitatione Christie* (1418) が，最初からラテン語で書かれたのか，中世オランダ語の方言で書かれたのが後にラテン語に訳されたのか，著者が Jean Gerson (1367—98) か Gerard Groote (1340—84) か，伝承による著者 Thomas à Kempis (1380—1471) が，実は著者ではなく，加筆編集者であった等々の解説はともかくとして，流布本や英訳の種類を調べ上げることが，*Robert Elsmere* という文学作品を問題にする際に特別に重要視されるべきであろうか。筆者は殊更これに深入りするのは避けたい。小説の作者にとって，キャサリンの父親のかたみの書物が，登場人物のイメージ造りに如何に象徴的な役割をになったかという視点こそのぞましいものであろう。キャサリンが読んでいたのは John Wesley (1703—91) の抄本か，それとも John Keble (1792—1866) のオックスフォード版かいずれかという枝葉末節の詮議に時間をかけるのが学問的であると信ずる編集者がもしいたら，ペイターの "Robert Elsmere" のみ存在して，*Robert Elsmere* は絶版で入手不可能と信じ，諦めて逝かれた日本ペイター協会の物故会員の諸先生方に，筆者は身の不運を訴えねばならない立派な理由が存在する。

Robert Elsmere が，日本の英学史の中で，空白の状態に置かれた理由のひとつに，当時の Oxford の精神的風土の特異性をあげねばならない。著者のメアリ・ウォードは，その教養において，才能と実力において，いわば変革期の Oxford の花形であった。同時代の Charles Kingsley (1819—75) の社会思想が比較的早く輸入されたのに反し，彼女の著作が，日本の読書界に全く迎え入れられなかったのは，日本英学史上の珍現象といわねばならない。結局 John Milton (1608—74) の *Paradise Lost* (1658—63; 1667) をさえ，宗教詩という認識でしか受入れられなかった明治の知識人には，彼女の文学のテーマであるキリスト教的懐疑思想を読みこなすだけの予備知識が浸透していなかったと

結論せざるを得ないのである。英本国はもとより，アメリカ大陸の大多数の大学図書館は，二，三種類の違う版の *Robert Elsmere* をその蔵書の中に所有している。今春のアメリカ旅行の結果，確認した事実であるが，東部の Yale や Harvard の方が，西部の Berkeley や Riverside の加州大学より豊富に彼女の著作を揃えている。流石に初版の三巻本はどこに行っても見ることはなかったが，メアリ・ウォードの翻訳になる *Amiel's Journal* を初め，28篇の小説の大部分は Harvard の大学図書館で見ることが出来た。因みに彼女は1906年と1916年の二回，大西洋を越えて新大陸を訪れている(3)。本論文中，彼女を通称にしたがってウォード夫人と呼ぶべきか，メアリ・オーガスタ・アーノルド・ウォードと呼ぶべきか，決めかねる問題であるが，アーノルド家の一員であることが強調される場合を除いてメアリ・ウォードに統一する。決めかねた理由のひとつは，英国の図書館の著者カタログには "Mrs. Humphry Ward" とあり，米国では "Mary Augusta (Arnold) Ward" とあるためである。本人はすべての出版物を Mrs. Humphry Ward としているので，註および参考書目は original books の記名にしたがう。

1. アーノルド家出身の女性作家

メアリ・アーノルドは1851年，すなわち William Wordsworth(1770—1850) の死の翌年，New Zealand の Tasmania で生まれた。父親の Thomas Arnold(1823—1900) が，その土地の督学官であった。5歳の時，彼女の一家は帰英して，Fox How の祖母の許で暫くすごした後，Oxford に移り，そこで成長する。やがて Brasenose College の研究生 Humphry Ward (1845—1926) と結婚し，小説家を志して1881年に処女作 *Milly and Olly* を発表する。続いて出世作 *Robert Elsmere* の執筆にとりかかったが，完成したのは1888年である。日本では，発表当時，高い評価を受けた事実だけが知られていた。それ故 *Robert Elsmere* そのものの作品としての評価は問題に出来ず，ペイターの批評論の批評が本文不在のまま行なわれ，その周辺の詮索や臆測ばかりがかまびすしかった。メアリ・アーノルドの家系や，ペイター家との交遊は，

Oxford の大学を中心とする思想的な背景を考え合わせれば，必ずしも無意味な探索ではなかったが，肝心のペイターの評価の根底に触れるには，どこかもどかしい感じがつきまとうのであった。

筆者は，1968年夏，短い英国滞在の間に，Cambridge の大学図書館で，初めて *Robert Elsmere* 全三巻を手にした。また同じ著者による作品のリストをしらべて，その著作量の多さに一驚したものである。もちろん著作量の多さだけが作家の力量を示すとは限らない。現実に世評と歴史の篩にかけられて生き残ったのは *Robert Elsmere* 一冊と一般にはいわれている(4)。彼女より一世代早く生まれている George Eliot(1819—80) や，Mrs. Gaskell (1810—65) にくらべ，彼女が思想的にも技術的にもすぐれた作品を書いているかどうかの疑問は残るが，むしろ現在なお評価の定まらない女流作家とする方が彼女にはふさわしい。とにかく発表当時の *Robert Elsmere* の爆発的な売れ行きを考えると，その生存中には殆ど売れなかった作品を，営々と書き続けていたブロンテ姉妹の誰よりも，はるかに幸運な女性だったといわねばならない。その時すでに，「Oxford の特殊な雰囲気を知る者たちが死に絶えた時に，この作品は忘れ去られるであろう」と予言めいた言葉(5)を洩らした人間もいたし，事実その通りだった。しかし，最近になって，19世紀末の Christian Humanism の流れを問題にする際に，この作品の持つ意義は無視できないことになった。

メアリ・アーノルド・ウォードは，ラグビー校の Dr. Thomas Arnold (1795—1842) を祖父に，詩人として批評家として有名な Matthew Arnold (1822—88) を伯父に持つアーノルド家の一員であることに誇りを持っていた。彼女とペイター家との交流は，1869年，ペイターが Dresden にいた姉と妹をよび寄せ Oxford の Bradmore Road に一家を構えた時にはじまった(6)。ペイターの "Robert Elsmere" を当時のすぐれた作品論の一つに数えるのを筆者は躊躇しない。そして作品の主題に対するペイターの共感と，同じ教養小説のジャンルで創作を手がけた両者が，同時代人としての共通の問題意識でもって，深くむすばれているのを認める。ペイターは，作者メアリー・ウォードが創造した人間群像の中で，どちらかといえば，女性の人物の方が生き生きと描かれ，主

人公ロバートを初め，男性がやや観念的類型を脱し切れない点を指摘するが，彼自身は女性を描くことの不得手な人間であった。作品の構成上の手法や，登場人物の性格論を述べる前に断っておくが，作家としてのメアリ・ウォード評価をペイターの批評研究の一環として論ずるなら，当然必要な予備知識としてBradmore circleに触れねばなるまい。

今日ならば，知的名門に生まれたことそれ自体はそれ程意味を持たないかも知れない。しかしOxfordに最初の女子大学Lady Margaret Hallが設立されたのはようやく1878年になってからということに注目せねばならない。二番目に古い歴史を持つSomerville Collegeが1879年に誕生した際の初代学長は実にこのメアリ・ウォードその人なのである。ペイターの妹Clara Ann Pater (1841—1910) は副学長としてラテン語，ギリシャ語，ドイツ語を教えた。メアリ・アーノルドが，しばしば斜向いのペイターの家を訪問した(7)のは，この妹と特別親しかったからである。ペイター家にはもう一人，ペイター自身にも，このクレアラにも姉にあたるHester Maria Pater(1837—1922)がいて家政をみていた。この姉は料理や手芸にも長じた，たいそう家庭的な人柄であったらしい(8)。筆者はクレアラの手紙を数通Brasenose Collegeの古文書の中にみつけたが，ヘスターの筆跡は遂に発見出来なかった。すべてに控え目で，手紙一本書くのも，インテリの妹にまかせていた様子である(9)。

成長期のメアリの上に，その家庭の知的水準が大きく作用したことは留意すべきである。特に大学教育から女性が締めだされていた時代のアーノルド夫人たちのサロンに，父や伯父を中心に集まる学者たちの話題は，才能ある女性にとっては大きな刺激であった。Clough家や，Wordsworth家やHuxley家の人々はよくArnold兄弟を訪問した。Charlotte Brontë (1816—55) さえもFox Howの祖母の山荘に出入りしており，強い印象を受けた女性としてメアリの記憶に残っている(10)。

Jane Austen (1775—1817) が，飽きもせずに，恋愛と結婚に伴う階級と人間性のテーマを書き続け，それ以上の社会的事件は扱わない独自の限界を守っているのに反して，メアリ・ウォードはもっと大胆に，宗教的，社会的テーマ

を取り入れた。彼女の創作活動は，最初からある華麗さに包まれている。ジェイン・オースティンは，これとは対照的である。小説を書いていることを，家族にさえも知らせず，自分の部屋のドアや，書き物机に，特別な仕掛をしておいて，人が来る度に書きかけの原稿を隠しながら，密やかに書き続けて数篇の傑作を世に送った。田舎の教区の世話好きな牧師夫人の催すお茶の会で，主人公ロバート・エルズミアがキャサリンと出会うまでの経過は，メアリ・ウォードがオースティンから学んだものと誰しも考える。しかし，英国国教会の地方教区の牧歌的な秩序にいつかは衝撃を与えずにはおかない時代の流れはオースティンも予感はしていた。メアリ・ウォードは大胆に社会小説のテーマとして，正面からこれに取り組んだ。主人公ロバートが亡父から受け継ぐことになっていた牧師禄を受けるか受けないかの問題が，作品の中心的課題として深い関係を持つのはこの点である。

少年ロバートの好学心は，結局，卒業後，国教会教区の牧師となる義務を受け入れることによって，Oxford への進学を果たした。これが彼にとって問題の始まりであった。当時はこのような状況で Oxford に学んだ青年がどのくらいあったかはわからない。国教会の牧師となる ordination の儀式が後には苦痛となる可能性[11]について，すでに Balliol College の Benjamin Jowett (1817—93) を中心とする liberalist たちは，叙任権を一手に握る Christ Church の教授たち Edward B. Pusey (1800—82), Henry Liddell (1811—98), Henry Liddon (1829—90) らと激しい論争を繰り返していた。神学上の問題のみならず制度上の問題でもあった点を同時代の作品を読むに当って心得ていなければならないであろう。

アーノルド家では，Matthew は20歳で，メアリの父 Thomas は 19 歳で，父親の急死に遭った。父とあまり年のちがわない伯父は，ニューマンの説教の言葉の美しさに引かれて日曜毎に聖メリー教会へ出かけたり，詩集を出したり，多情多感な青年時代を送っている。Dr. Arnold を彼女は知らずに生まれたが Oxford の社会にあって祖父の重みは大きかった。彼女の回顧録 *A Writer's Recollections* (1918) を一読すれば，次男であった父の期待にはぐくまれ

た女性が，その恵まれた環境を生かし，十二分に天与の才能を開花させ，十分に生きそして書き，安定した名声を得て，悔いの少ない一生を送ったことがわかる。Aphra Behn(1640—89) の不運や，Virginia Woolf(1882—1941) の挫折は，少なくとも彼女の前半生には縁のないものであった。後半生の経済的貧窮は，彼女の責任ではない。伯父アーノルドのことは，かなり抑制のきいた筆致で描いているが，彼女の父が一度カトリックに改宗した後，更に国教会に復帰していることについては自伝の中では一切触れていない。オースティンなら決して取り上げなかったテーマに彼女が取り組んだ動機は，アーノルド家に深くその根を持っていたわけである。

Robert Elsmere の最初の構想は，1878年頃からメアリ・アーノルドの頭にあった。一人の大学生と，その tutor との間で交される不可知論についての対話形式の習作で，後に書かれた長篇小説のスケールではなかった。それは彼女が，Bodleian と家庭の間を往復しながら，J. E. Renan (1823—92) の *Histoire des l'origines du Christianisme* (1863—83) を読み，マシウ伯父はたいして反響のない "Supernatural Religion" とか "Literature and Dogma" とか "God and the Bible" 等の論文を連続して発表していた時期(12)にあたる。

ペイターは *Robert Elsmere* の作者としての彼女を認める前に *Amiel's Journal* の翻訳者としてのメアリを高く評価していた。ペイターの妹のクレアラが，教師の資格を得ようとして，熱心にラテン語の勉強にはげんでいたのもこの頃のことで，学問する女性を "all the elegant blue-stockings"(13)という表現で *Marius the Epicurean* (1885) の中に描いているのは，こうした一群の女子学生が，Bodleian の読書室や Sheldonian Theatre の公開講演会の会場に姿を現わすことからの連想であろう。妹の勉強を保護者的な意識で見守っている背後にアーノルド家への対抗意識がなかったとは考えられない。マシウ・アーノルドのオックスフォード大学詩学教授就任は，ペイター家の側から見れば決定的な敗退を意味する。それ以後周知の如く，英文学史はアーノルドを批評家としても優位に置いた。

Robert Elsmere は最初から三巻本として発表されたのではなく，第一巻は

1882年2月に出来上っている。メアリ・ウォードは Bristol に赴く伯父にこれを贈り，どんな批評がきけるかと固唾をのむ思いで待っていた。彼女の許に届いたのは，マシウ・アーノルドがその地で急逝したという悲報であった(14)。

2. *Robert Elsmere*

Robert Elsmere の初版は三冊に分かれており，1888年，Smith Elder 社から出版された。菱形の地模様のある濃い green-blue の布表紙で，かなり凝った装丁である。Vol. I と Vol. III には，half title の前に blank leaf があり，Vol. II にはない。内容について云えば，第一巻は，ロバートとキャサリンの結婚まで，第二巻は Clergyman としての主人公を，第三巻は英国国教会からはなれて，New Brotherhood の運動に没頭するロバート・エルズミアを中心に描く。

Westmoreland の自然を背景に，父亡き家庭の三人姉妹の長女で，母を援け支えながら，しかも父の遺訓を守って，村の困っている人々を訪ねては慰めをあたえる評判のけなげな娘が，たまたま教区の牧師館のお茶の会で，Oxford の神学生ロバート・エルズミアと出会い，やがて結婚する。彼は将来牧師になることを条件として大学生活を送った。彼には，アイルランド系の少々きまぐれな，派手好みでロマンティックな性質の母親がいて，田舎住いは性(しょう)に合わないのをなげきながら，息子の立身と生活の基盤を確保するために，Surrey の牧師館で留守を守っている。エルズミア未亡人と，質実なキャサリンとは，もともと相反する性格なのだが，ロバートが結婚して牧師館に落着くや，二人の争いが起る暇もないうちに，この母親はあっけなく他界してしまう。

作者は，第一巻では，ロバートよりも生家におけるキャサリンを描くことにより多くの情熱を傾けているように見える。彼女はロバートに，亡き父が郷党の期待にそむいて大学を中退した理由を次のように語る。

"He used to say that it was all changed. The young fellows he saw when he went back scorned everything he cared for. Every visit to Oxford was like a stab to him. It seemed to him as if the place was full of men who only

wanted to destroy and break down everything that was sacred to him."(15)

ロバートは，彼女の父が Oxford に学んだのは Tractarianism につづく20年余りの "Liberal reaction" の時代だろう，と推察する。"Robert Elsmere" でペイターは，物語の始る前に，もう既にこの世の人ではなくなっているキャサリンの父親，Richard Leyburn に深い関心を示し，かなりのスペースを割いてその人柄と，娘への影響の大きさを指摘している。純粋で献身的な善意の人間であったが故に，学業を完成することが出来ず，故郷の Westmoreland に帰った後もさまざまの不幸に見舞われて家産を傾けてしまった。しかし，すべてを浪費したと自分を責めながらその生涯を終るが，死に際に娘に遺言する言葉(16)は感動的である。これがキャサリンの生涯の方向をきめ，労多い人生を送る夫ロバートと行動は共にするが，Anglican orthodoxy を最後まで棄てていない。いわばリチャードは，死後なお記憶され続け，娘のうちに生きて，守護者の役割を果しているとペイターは考える。作者が女性の性格描写にすぐれていることを，しきりにほめそやすとおり，Mrs. Fleming や Mrs. Thornburgh や Mrs. Darcy のように，それぞれ興味のある性格の女性は多いけれど，"a clear soul, an iron will"(17) の持ちぬしが全篇を支えるヒロインとして迫力を持っている。

第二巻以後に，作品中の underplot とも云うべき Rose と Langham の交渉が組み込まれる。ペイターは，作者に最も近い人物をダーシー夫人の中に見出しているようであるが，キャサリンの次の妹のローズの方が，その芸術的な資質から云っても，自己主張が強く，相手の中に溶け込みきれない核のようなものを芯に持ちつづける女性として，作者の分身に近いものがある。母を説きつけて，ロンドンに音楽の勉強に出かけ，時々姉の住む Surrey の牧師館を訪れるが，そこで知り合ったロバートの大学時代の tutor と，姉をはらはらさせる交際を始める。この二人の交渉は，ロバート・エルズミアの思索のために滞りがちになる物語の進行を時には促し，時には単調さを破る傍筋と単純に考えてもよいかも知れない。家庭を守る立場になったキャサリンは，第一巻の生き生きした個性を次第に失って行き，父の形見の *Imitation* を読みながら，夫の不

遇と正統性からの逸脱をじっと耐え忍ぶ姿勢に固定されてしまっている。ひとり egoist のローズが，奔放な振舞で，ランガムや読者を圧倒してしまうのは，小気味よい感じさえする。

Knoepflmacher は，ローズの性格を，ジョージ・エリオットの *Middlemarch* (1871—2) の Dorothy の variation だと云う。そして，エリオットとメアリ・ウォード，当時お互いにライバル意識を持っていたように書いている。この二人のメアリ（G. エリオットの本名は Mary Evans）は 20 分間だけ Oxford の Pattison 家の居間で話し合ったことがある[18]。ペイターは，不思議なことにエリオットの力量はたいして認めていなかったらしい[19]。

最近出版された *Mrs. Humphry Ward* (1973) の著者は，ペイターと同性愛の傾向をもつランガムとの近似性[20]を指摘するが，ペイターは全くこの傍筋の存在を無視している。ローズとランガムは，きわどい冒険をさんざんやってのけたあげく，最後まで結婚しない。ペイターの沈黙が何を意味するか，問題を感じる点でもある。

Marius the Epicurean にしてもそうであるが，主人公の思想的成長のあとを辿り，思索の細かい部分を描こうとすればするほど事件の発展のテンポがおそくなり，教養小説の作者は，文体上の変化をもたらす手法を考え出すことを余儀なくされる。ローズとランガムを，一種の ambivalence の緊張関係に置くことによって，ロバートとキャサリンの関係を対照的にきわ立たせようとしたとも解釈できる。しかしペイターの評論の行き着くところは，正統と異端の間の和解は可能かという多年の課題であり，作品構成上の技法ではない。

Robert Elsmere の第三巻のテーマは ギャスケル夫人の思想にかなり接近している。救いは教会の中にあるのではなく，人々との愛の交わりの中に見出だされる。実在した人物，Balliol College の Sir Thomas Hill Green (1836—82) が，ロバートの片腕の Grey 氏として登場する。ロバートは彼と共に New Brotherhood の運動に献身する。物語はロバートの死を以って終るが，読者の要請にこたえて，続篇ともいうべき *The History of David Grieve*(1892) が書かれ，キャサリンの後日物語がその主題となっている。

Robert Elsmere に関しては，ペイターの他に Gladstone (1809—98), Kipling (1865—1936), Thomas H. Huxley (1825—95), Meredith (1828—1909), Webb 夫妻がそれぞれ批評を寄せている。作者は Henry James (1843—1916) の手紙が批評としていちばん気に入ったようである。Ferdinand Brunetière (1849—1906) が早速フランス語訳を試みたことも，つけ加えるべきであろう。

3. 教養小説と批評の間

ペイターは，"Robert Elsmere" の最初に，このさわがしい時代，単なる時間つぶしの娯楽を求めてではなく，より高尚な楽しみと，ためになる何かを求めて fiction を読む人々にとって，*Robert Elsmere* は熟読に値する書物であると述べている。作品の完成度は，ジェイン・オースティンやジョルジュ・サンドのそれに匹敵すると評したのは，メアリ・ウォードの story-teller としての素質を認めての批評であろう。

しかしペイターの心底からの讃辞は，宗教上の問題を以って読者に挑戦する大胆さに向けられている。たしかに *Robert Elsmere* の主題そのものは，当時の多くの知識人，Oxford Movement と Darwinism の谷間で混迷を続けていた人々の注目を浴びるに十分なものであった。ペイターの *Marius the Epicurean* (1885) にしても，Samuel Butler (1835—1902) の *The Way of All Flesh* (1872—84 ; 1903) にしても，Edmund Gosse (1849—1928) の *Father and Son* (1907) にしても，英国国教会の矛盾と混迷をつきながら，さてどこに向うべきかを見失った人間の模索の記録と云わねばならない。殊に *Marius the Epicurean* の著者にとって，メアリ・ウォードの勇気は，ペイターが同時代人として素面では云い得なかった Religion of Humanity の主張を正面から行なったものとして，一種の美望の念さえ感じたであろう。ペイターは，コールリッヂ論[21] (1866) を書き終った時，すでにこの主張の破壊的な側面が，非難の対象となることを悟り，*Marius the Epicurean* の中では Religion of Sanity[22] という言葉に置き換えて Epicureanism の擁護を行なっている。当時の Oxford の知識人が，ルナンの描く人間イエスのイメージを魅力あるもの

と考えたように，ペイターは，初期キリスト教が，まだ組織化されない前の時代へと回帰して行った。

Marcus Aurelius 皇帝の時代にメアリアスを創り出したことを，筆者はかねてペイターの周到な仮面と考えていた。メアリアスは Oxford の学者の原型で Tractarianism に対するペイターの反応と考えてよいと思う。1960 年代になって初めてその所在の明らかになったペイターの未発表原稿の中に 'On Newman's Writings' と題する一篇がある。ペイターは Tractarianism に対する自分の態度を明らかにするのは時期尚早と判断して J. H. Newman (1801—90) の生存中には発表しないでおいたものらしい。

ペイターが崩壊への道を辿り始めた古代ローマ帝国の皇帝であり哲学者である人物の苦悩をメアリアスの観察を通して同情的に描いたのは，同様に組織の頂点にいた Oxford のいくつかの学寮の長や liberal な陣営の思想家たちが常に念頭にあったことが察せられる。

ペイターのような仮面が必要なかったことは，メアリ・ウォードが女性であったことのさいわいの一つに数えられよう。さきに述べたような家系に連らなることも，作家としての思想形成に十分な恩恵をもたらした。田舎の教区の牧師の娘に生まれたジェイン・オースティンは，どの小説の中にも，インテリの男性を二人だけにしておくようなことはしなかったが，彼女は最初の構想の時すでに，ランガムとエルズミアの会話を考えていた。またロバートが Surrey に赴任した際の地主とのやりとりなどもその例であり，メアリ・アーノルドの自信を示す。Oxford の社会は，教養小説の発生と流行を産みだすに充分な素地を用意していた。

現在では，メアリ・ウォードは忘れられ，ジョージ・エリオットの方が女性の教養小説の作者としては一流のレッテルを貼られている。*Robert Elsmere* の登場人物ローズのモデルをエリオットとする研究者もいる[23]。思想的な共通点を持ちながら，生存中と没後とで，この二人の評価は全く逆転している。

Robert Elsmere は，たしかに当時の卓越した人々の注目を浴び，賞讃の言葉に包まれた。*The Renaissance* (1873) 発表後，ペイターは，*The New*

Republic (1877) の中で，Mr. Rose として caricatureされた[24]。同じ運命が，やがて彼女の身の上にも起っている。Max Beerbohm (1872—1956) が *The Poet's Corner* (1904) の中で，伯父と彼女の間柄を諷刺画として描いたのである。メアリ・エヴァンズがメアリ・アーノルドのような知名度の少なかった女性であること，しかも男子名を名乗ることによって問題の提出者が女性であることを世間に知られまいとしたことを，筆者は思い出さざるを得ない。女流作家を表看板にしないで，筆名という仮面の下に作品を発表することに，却って，徹底した職業意識のたしかさが考えられないだろうか。当時一般にものを書く女性に対して世間の目が厳しかったということより，一歩進んで，怪奇小説の伝統に彩られた女流作家のイメージを避け，女流ものというレッテルを貼られることはエリオットとして極力避けたかったのであろう。その点，メアリ・ウォードは，エリオットほどに文学を天職とする意識に徹していなかったと思う。社会への関心はいたって旺盛だったにもかかわらず，彼女は終生 anti-suffragist であった。後半生を捧げた身体障害児童の教育事業を支えるため，商業主義といえるくらい，一年に一作の割合で書きまくり，著作で得た印税の殆どをこれに注ぎ込んだ。彼女の社会事業家としての活動を，一種の貴族主義のあらわれと視る必要はないが，著作活動が二次的な手段となって，思想上の進歩がみられなくなった点は惜しまれる。思想的に，先輩のジェイン・オースティンは追い抜いたが，ジョージ・エリオットは追い抜けなかった感がある。

ペイターの "Robert Elsmere" に対して，田部重治(1884—1972)は，「原作と読みくらべることが出来なくて残念だが，著者と批評家の間に意見の相違があるようである」[25]と述べ，工藤好美氏は全面的にペイターの懐疑主義擁護の立場に立ち，「彼等の疑い，彼等の哲学上の不確かさの特殊な様相」[26]をキリスト教の神秘思想に結びつけようとしている。キャサリン父子に焦点を合わせれば，田部説が正しく，グレイ氏の理論は工藤説に近接している。いずれも原作を読むことなしに推論しているが，要するにこの時代の批評家と作家は極めて近い立場にあり，すぐれた批評が，忘れ去られた作品を想起させ，再評価の機会を要請すると云う批評の機能が，ペイターの "Robert Elsmere" において

果たされている一例が認められるのである。

(1975年6月20日)

〔註〕

(1) Mrs. Humphry Ward, *Robert Elsmere* (London: Thomas Nelson and Sons, 1952), p. 275.

(2) Walter Pater, *Essays from "The Guardian"* (New York: Books for Library Press, 1969), p. 62.

(3) Enid Huws Jones, *Mrs. Humphry Ward* (London: Heinemann, 1973), p. 149, p. 160.

(4) U. C. Knoepflmacher, *Religious Humanism and the Victorian Novel* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1965), pp, 3—12.

(5) Jones, p. 81.

(6) Lawrence Evans, ed. *Letters of Walter Pater* (Oxford: Clarendon Press, 1970), p. xli.

(7) Mrs, Humphry Ward, *A Writer's Recollections* (London: W. Collins Sons, 1918), p. 128.

(8) Evans, pp. xxxii-xxxiii.

(9) Ibid., p. 157.

(10) Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p 24.

(11) Thomas Wright, *The Life of Walter Pater*. 2 vols. (New York: Haskell House, 1969), pp. 209—10.

(12) Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p. 165.

(13) Walter Pater, "Stoicism at the Court", *Marius the Epicurean* (London: Macmillan, 1924), p. 124.

(14) Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, p. 240.

(15) Mrs. Ward, *Robert Elsmere*, p. 40.

(16) "Catherine! Life is harder, the narrower way narrower than ever. I die in much perplexity about many things. You have a clear soul, an iron will. Strengthen the others. Bring them safe to the day of account." Ibid., p. 103.

(17) Walter Pater, *Essays from 'The Guardian'*, p. 60.

(18) Mrs. Ward, *A Writer's Recollections*, pp. 107—110.

(19) A. C. Benson, *Walter Pater* (London: Macmillan, 1907), p. 192.

(20) Jones, pp. 74—5.

(21) Walter Pater, "Coleridge's Writing", *Westminster Review*, 29 (January, 1866), pp. 106—132.

(22) Knoepflmacher, pp. 170—188.

(23) Ibid., p. 12, f 27.

(24) William Hurrell Mallock, *The New Republic*. 2 vols. 3rd ed. with full name (Lon-

don: Chatto and Windus, 1877), pp. 114—158.

(25) 田部重治，ペイターの作品と思想（東京：北星堂，1965), pp. 207—8.

(25) 工藤好美，ウォオルタア・ペイタア（東京：岩波書店，1927), pp. 283—4.

参考文献

テクスト：

Pater, Walter. "Robert Elsmere". *Essays from 'The Guardian'*. 1901; rpt. New York: Books for Libraries Press, 1969. pp. 53—70.

Ward, Mrs. Humphry. *Robert Elsmere*. 1888; rpt. London: Thomas Nelson and Sons, 1925.

参考資料：

Baker, Joseph Ellis. *The Novel and the Oxford Movement*. 1932; rpt. New York: Russell & Russell, 1965.

Benson, A. C. *Walter Pater*. 1906; 2nd ed. London: Macmillan, 1907.

Cecil, Lord David. *Walter Pater: The Scholar-Artist*. 1955; rpt. Folcroft: Folcroft Press, 1955.

Chandler, Edmund. *Pater on Style*. Copenhagen, 1958; rpt. Folcroft: Folcroft Press, 1969.

Chapman, Raymond. *Faith and Revolt: Studies in the Literary Influence of the Oxford Movement*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1970.

Crinkley, Richmond. *Walter Pater: Humanist*. Lexington: The Univ. Press of Kentucky, 1970.

DeLaura, David J. *Hebrew and Hellene in Victorian England*. Austin: Univ. of Texas Press, 1969.

Evans, Lawrence. ed. *Letters of Walter Pater*. Oxford: Clarendon Press, 1970.

Fletcher, Iain. *Walter Pater*. London: Longmans, 1959.

Gosse, Edmund. "Walter Pater". *Critical Kit-Kats*. 1896, 3rd ed. London: Heinemann, 1913. pp. 239—271.

Greenslet, Ferris. *Walter Pater*. London: Heinemann, 1905.

Hough, Graham. *The Last Romantics: Ruskin to Yeats*. London: Duckworth, 1949.

石原　謙，キリスト教の展開：ヨーロッパ・キリスト教史　下。東京：岩波書店，1972.

Johnson, R. V. *Walter Pater: A Study of his Critical Outlook and Achievement*.

London: Cambridge Univ. Press, 1961.

Jones, Enid Huws. *Mrs. Humphry Ward.* London: Heinemann, 1973.

河合栄治郎，トーマス・ヒル・グリーンの思想体系 上下，東京：日本評論社，1930.

Kermode, Frank. *Romantic Image.* London: Routledge and Kegan Paul, 1957.

Knoepflmacher, U. C. *Religious Humanism and the Victorian Novel: George Eliot, Walter Pater, and Samuel Butler.* Princeton: Princeton Univ. Press, 1965.

工藤好美，ウォオルタア・ペイタア，東京：岩波書店，1927.

Mallock, William Hurrell. *The New Republic: or Culture, Faith, and Philosophy in an English Country House.* 2 vols. 3rd ed. London: Chatto and Windus. 1877.

McKenzie, Gordon. *Literary Character of Walter Pater.* Berkeley & Los Angeles Univ. of California Press, 1967.

Monsman, Gerald Cornelius. *Pater's Portraits: Mythic Pattern in the Fiction of Walter Pater.* Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967.

斎藤　勇編，英米文学辞典，増訂新版，東京：研究社，1961.

Starkie, Enid. *From Gautier to Eliot.* London: Hutchinson Univ. Library Press. 1960.

Symons, Arthur. *A Study of Walter Pater.* 1932: rpt. Folcroft: Folcroft Press, 1969.

田部重治，ペイターの作品と思想，東京：北星堂，1965.

植木錬之助，ウォルタア・ペイタアの研究，東京：弘文堂，1960.

Ward, Anthony. *Walter Pater: The Idea in Nature.* London: MacGibbon & Kee, 1966.

Ward, Mrs. Humphry. *A Writer's Recollections.* London: W. Collins Sons, 1918.

Wright, Thomas. The Life of Walter Pater. 2 vols. 1907; rpt. New York: Haskell House, 1969.

山脇百合子，「アフラ・ベエン」，実践文学，No. 16，東京：実践文学会，1962.

矢本貞幹，近代イギリス批評精神，東京：創元社，1948.

矢本貞幹，イギリスの文学思想，東京：研究社，1964.

矢野峰人，近英文芸批評史，東京：全国書房，1943.

Young, Helen Hawthorne. *The Writings of Walter Pater: A Reflection of British* Philosophical Opinion from 1860—1890. 1933; rpt. New York: Haskell House, 1965.